

## 共同利用研究集会講演要旨

# 牡鹿半島の漁業と村落構造 一下駄と藁草履と雪駄の行方—

戸邊優美

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課

## 要旨

三陸海岸の最南端に位置する牡鹿半島は、内海の表浜と外洋の裏浜という地理的な区分から、漁業や村落構造が把握されてきた。漁獲物や漁法の傾向が分かれるため、表浜・裏浜の区分は牡鹿半島的な特徴を把握しやすいものの、村落構造とのかかわりで漁業的特質を捉えるには個別の集落に基づき分析することが必要である。「大原浜は桐の下駄、給分浜は藁草履、小渕は雪駄」という慣用表現は、それぞれの集落の村柄を評した言い回しであるが、その背景には集落が展開した歴史があり、それぞれの集落の人口動態、村落構造とも関連していた。同族関係や講集団による村落構造も異なる、各集落の性質は、東日本大震災以降の集落社会の在り方も左右することとなった。震災を超えて集落を持続するための各集落の対応にも着目する。これらの作業を通して、半島南部の牡鹿地区を中心に、一括りではない多様な集落の集合として牡鹿半島を捉え直したい。

## 1. はじめに

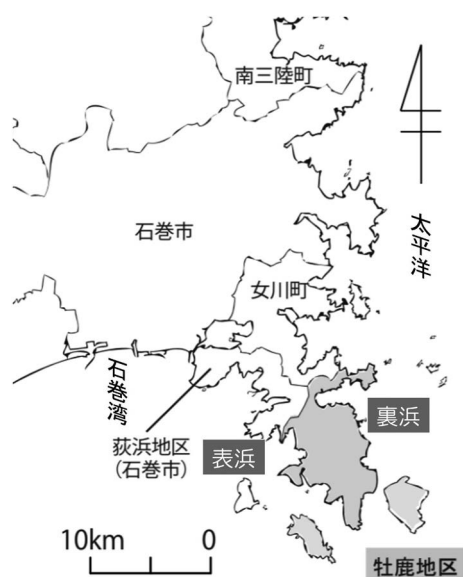
三陸海岸の最南端に位置する牡鹿半島は、藩政期には牡鹿郡浜方と呼ばれた地域で、当時の狐崎組、十八成組、女川組の区分は、現在の石巻市荻浜地区、石巻市牡鹿地区（旧牡鹿町）、女川町に相当する。周辺の有人島である田代島（荻浜地区）、網地島（牡鹿地区）、金華山（牡鹿地区）、江島（女川町）、出島（女川町）も、同様に藩政期からの地域であり、陸地だけではなく海面を中心とした地域的広がりが窺える。集落は狭い湾や入り江に形成されることが多く、平地に恵まれない地域では主に漁業を主要産業として展開してきた。

牡鹿半島では、石巻湾側を表浜、太平洋側を裏浜と呼んできた。半島内で両方の海に面しているのは牡鹿地区のみであり、表浜と裏浜の区分は特に牡鹿地区において

重要といえる。魚が回遊する内海の表浜と外海で岩礁の多い裏浜では、漁獲物や漁法が異なるほか、交通手段や流通網がそれぞれ石巻と女川につながる形で展開してきた。表浜と裏浜は明確な違いがあるものの、他方で交流が断絶しているわけではない。表浜の大原浜と裏浜の谷川浜間は陸路でつながっており、中学校が同じであるなど日常的な往来があった。また、牡鹿漁業協同組合は、表浜の鮎川浜、十八成浜と裏浜の新山浜で構成されている。こうした集落同士の関係は、牡鹿町が誕生する昭和30（1955）年以前の行政町村・鮎川町と大原村から続くものも多い。このように牡鹿地区は、表浜・裏浜の地理的区分と、鮎川町・大原村の古い行政区分が重なり合うようにして、集落同士がつながってきた。

集落同士のつながりとしては、本郷とそこから分かれた端郷の関係もある。その様態も、本郷への依存度が高い端郷、本郷より経済的・人口的に規模が大きい端郷など様々である。また、周辺集落に労働を供給してきた在町的な集落がある一方で、ほとんど内部の住民で完結してきた自給自足的な集落もあり、こうした経済的な在り方の違いは、家や村落集団、漁撈組織など村落構造とも結びついている。したがって、半島や島などの地域において、一つの集落を取り上げて、それが全体の特徴であるように説明されることは必ずしも正確ではない。牡鹿半島の場合、表浜と裏浜の区分から漁業や村落構造を一括りに捉えることは、集落の実態を看過することになる。各集落の差異を様々な角度から比較し、集落同士のつながりを見ることが、全体を捉えるために必要な作業といえる。

牡鹿半島は、平成23（2011）年に牡鹿半島沖を震源とする東北地方太平洋沖地震で発生した津波によって、甚大な被害を受けた。漁業関係者の廃業や、集落自体が解散した例もあり、震災の前後で漁業と集落をめぐる状況は一変した。荻浜地区桃浦のように、水産業復興支援特区の制度を活用して漁業の立て直しを図った集落もある。本稿では、漁業と村落構造の相関を検討するため、



地図1. 牡鹿半島と牡鹿地区

まずは震災前の集落における漁業的特質を明らかにする。そして更に、近接する集落同士を比較し、共通点や差異を捉える。この作業を通して、被災から10年が経過した牡鹿半島集落の復興について考察する。

## 2. 牡鹿地区における漁業的特質と村落構造の関連

### 2-1. 東日本大震災以前の漁業構造

牡鹿半島の沖合や沿岸では、手漕ぎ船など非動力船の頃から、定置網漁、刺網漁、釣漁、筒漁など多様な漁が行われてきた。他方で戦前から養殖漁業の取組みが始まり、現在はワカメ、カキ、ノリ、ホヤ、ホタテなどの養殖が行われている（牡鹿町誌編纂委員会 2005、宮城県水産研究開発センター 1990）。特に貝類の養殖は、岩礁が多く採貝が行われてきた裏浜で盛んである。また、裏浜では一本釣りや延縄漁など釣漁が主だったのに対し、石巻湾内の表浜では定置網漁に適し、複数の大謀網が建てられてきた。大謀網漁には多くの人手が必要となるため、漁の時期には宮古や気仙地方から大網師（大網子）を雇い入れていた。現在は小型定置網漁が中心になっている。

こうした漁業における地域差は、漁業従事者や漁業規模の量的データにも表れている。佐藤利明は、第10次漁業センサス（平成10年）から次のように整理している。牡鹿半島全体の漁家割合は、表浜は33.0%、裏浜は51.9%、漁船乗り組みなど漁業従事者世帯は、表浜は19.6%、裏浜は8.8%であり、裏浜に自営の漁業者が多い。ただし、後継者がいると答えた漁家のうち、表浜は29歳以下が43.4%、40歳以上が18.9%に対し、裏浜はそれぞれ29.9%、26.6%であり、裏浜の方が若い後継者が少ない結果となっている<sup>(1)</sup>。また、表浜の漁家は、漁獲金額が1,000万円以上の世帯が43.0%にのぼるのに対し、裏浜は1,000万円以上が29.7%、500～1,000万円が19.8%、200～500万円が22.0%と階層がある。佐藤は、「総じて、後継者がそれなりに確保され漁船漁業が盛んでしかも養殖漁業にも相応に取り組みされている集落では漁家の平均漁獲金額が多く、また、高齢化率も低い傾向にある。逆に、後継者がいないか、もしくは後継者のいる漁家が少数で、営まれている漁業も採貝・採藻中心であるような集落は漁獲金額が少ない。」と述べ（佐藤 2015: 157）、漁業規模と従事者、収益の相関により、表浜と裏浜の漁業的特質と村落構造の関係を示唆する。

その一方で、佐藤は「営まれていた漁業が集落ごとに多様性に富むことはセンサス・データからも相応に把握される」と、表浜・裏浜だけではなく各集落の実態把握が必要であることを指摘している（佐藤 2015: 158）。例えば、佐藤が論文中で示したセンサス・データのうち、牡鹿地区裏浜の漁家世帯数と漁家割合を見ると、北側から寄磯浜65軒60.8%、前網浜20軒83.3%、鮫浦15軒32.9%、大谷川浜15軒46.9%、谷川浜17軒21.3%、泊浜46軒76.7%、新山浜29軒90.6%であり、集落の規模とそれに対する基幹産業としての漁業の割合にはばらつきがある。このように、表浜・裏浜の傾向の違いは確かにあるが、全体的な傾向であり、集落ごとに漁業と村落構造のかかわりを見直すことが必要である。

### 2-2. 家・個人同士の結合

牡鹿半島では本分家関係など家同士の結合が強く、年

中行事や人生儀礼、祭祀、労働を共同することが一般的に行われてきた。各集落の村落構造を検討するために、現在すでに衰退している習俗を含め、家と家のつながりに着目したい。

牡鹿半島の本分家関係は、ホンケブンケといい、基本的に本家とそこから分かれた分家・別家によって構成される。分家はカトク（家の跡取り）以外の子が創出した家、別家はモライゴ<sup>(2)</sup>などが独立した家で、本家から同じ姓と家紋を与えられた。本分家関係と同じ、あるいは本分家関係に比べ系譜意識が曖昧な同族組織として、マケやシンルイがある。給分浜では、祭祀する神仏によって羽黒マケ、神明マケ、観音マケの三つの家筋に分かれていた<sup>(3)</sup>。また、寄磯浜では、口明けのときにマケから平等に働き手が出て、採取物を分配する「マケドリ」の慣行があった（亀山 1950: 503）。シンルイは、系譜上かかわりのない家同士の結合として、本分家関係とは別に機能しているところも多い。なお竹田旦は、南三陸地方ではマケよりシンルイが機能していること、シンルイが同族を、マケが親戚仲間を指すという語彙の逆転現象がみられることから、シンルイを同族結合として位置付けている（竹田 1969）。筆者調査では、牡鹿半島のシンルイは、1対1の対等関係を基本とする。他方で、新たに創出した分家や別家からシンルイになることを頼まれる場合もある。タノマレシンルイといい、頼まれる側の家は集落の有力者であることが多く、すでに複数のシンルイがいる場合がある。このため、後からシンルイになった家には、第二シンルイ、第三シンルイというように序列が生じる。頼まれた家が本家で、下位のシンルイが分家・別家である場合、シンルイは対等な関係というより本分家関係と同様に機能する。シンルイもホンケブンケと同様に超世代的につきあいを続ける。本家分家関係、マケ、シンルイとも、親族・姻族関係であるエンルイとは異なる結合であり、いくつもの家同士の結合が世代を超えて継続してきた。

家ではなく個人同士で結ぶ関係に、エビスオヤやナモレエオヤがある。男性は15歳、女性は結婚時にオヤを頼むもので、オヤからは新たに名前を授けられることが多かった。オヤを頼むタイミングが、男性が後述する契約講に、女性が女講中に入る時期と同じであることから、集落にとっての成人時期といえる。男女とも、コはオヤの繁忙期や冠婚葬祭の際に手伝いに行き、オヤは何かにつけコの世話を焼き、一生に亘って交際した。小淵出身の女性（昭和9年生）によれば、小淵では、エビスオヤはエビスゴたちの労をねぎらうため、正月に宴会を開き、米や反物などの土産を持たせた。男性のエビスゴの宴会より、女性の方が豪華だったという。

こうした様々な家・個人の強い結びつきのうち、本家分家関係は家の系譜に基づくが、タノマレシンルイやエビスオヤなどは依頼先への生活上の庇護者・後ろ盾としての期待があり、家筋の正当性や人望だけではなく、経済的に有力であることが重要だった。このため、網元、瀬主、船主などの下につながりが集中しやすかったといえる。なお、先ほど、寄磯浜でマケが磯漁の分配単位になっていたという例を述べたが、動力船以前、漁船の乗組員は「寄磯だけではなく、前網、鮫浦、谷川、江ノ島などの隣接する浜からも雇っていた」、マケは「漁撈にはあまり関係していない。漁撈で組んでやる時には、友だち同士とか気のあった人びとと一緒に行って」いたと



いう報告もあり（東北歴史資料館 1984: 33, 42）、必ずしも漁撈組織とマケなど同族組織は関連するものではなかったようである。

### 2-3. 女講中と漁業構造の関連

本分家関係やマケ、エボシオヤなど序列や上下関係が明確な結びつきに対し、構成員である家々の水平的な連帯として契約講がある。契約講は、宮城県を中心とした東北地方に分布する互助的な村落集団・村落制度である。牡鹿半島の場合、集落の祭り行事の執行や水難救助、共有財産の管理を担っていた。契約講の構員になれるのはカトクである男性のみであり、15歳になると加入した。契約構員である夫が不在の場合に妻が代理を務めることはできず、カトクの妻は女講中という女性の講に入ることになっていた。女講中は山神講や地蔵講など信仰的講を行うほか、婚礼道具や衣装の準備・貸出や嫁荷の引渡し儀礼など、婚礼への関与を担っていた。

この女講中は、牡鹿地区全域で現在は行われていないが、衰退の時期については、昭和前期から平成10年代まで幅がある（戸邊 2019）。早くに衰退したのが、鮎川浜と十八成浜で、どちらも表浜である。十八成浜は昭和20年頃まで、鮎川浜はそれより前に活動をやめてしまったと見られる。講集団としての活動が終わった理由ははっきりとしていないが、鮎川浜が近代に捕鯨で栄え都市化したこと、十八成浜も捕鯨や観光に関係する者が増え、人口の急激な変化や業種の多様化が起きたこととは無関係ではないと思われる。次に、昭和50年代の衰退として、大原浜、給分浜が挙げられる。どちらも表浜で、大原浜は非漁村、給分浜は半農半漁の集落である。女講中の衰退は、女性の労働や娯楽が多様化したことによる講へのモチベーションの変化もあるが、婚礼が自宅で行われなくなったことも大きな要因である。婚礼への関与は女講中の社会的役割だったが、謝金などを得る収入手段でもあったため、それが失われたことにより活動資金の調達が難しくなったのである。それ以外の集落では、概ね平成期まで続けられたが、一番遅く、平成15年頃まで活動が続いたのが、表浜にある小淵、裏浜にある寄磯浜、新山浜である。この3集落に共通するのは、漁家率が高い漁村という点である。基本的に漁業者同士は競合するが、陸で船を待つ女性たちは、生業暦や生活習慣、考え方が似通うことで共通性が高くなる。各集落の規模は異なるものの、人口変化が比較的緩やかで講集団が安定しやすかったことも関連しているだろう。

牡鹿半島の漁業は性別役割分業が明確で、漁業の主体は現代においても男性である。女性は一部の採貝・採藻を除き、陸仕事に徹してきたが、以上のように、在地的な講集団の継続についても間接的な漁業とのかかわりを指摘できる。また、表浜にある鮎川浜と十八成浜、大原浜と給分浜から女講中の活動は衰退したが、同じく表浜の小淵は遅くまで活動を続けていることから、表浜では早くに廃れ裏浜は長く維持されるというような2類型の理解の仕方は、適当ではないといえる。

### 3. 慣用表現に見る村落構造—下駄・藁草履・雪駄—

女講中の事例から、鮎川浜と十八成浜、大原浜と給分浜のように、隣接する集落同士は影響を与え合い、同じような変化の仕方をしていることが見受けられる。近い

集落同士が漁場争いに発展し、関係が一時的に途絶することしばしばあったが、日常的な接触・交流によって社会的・文化的に類似することもあった。

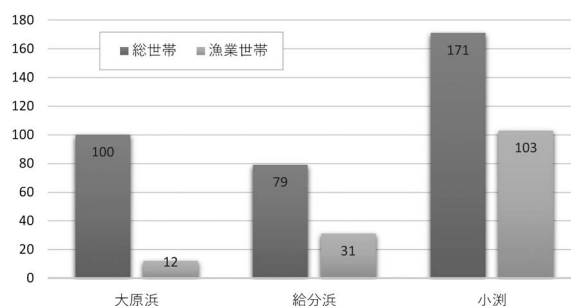
隣接する集落のうち、表浜の小淵倉浜と清水田浜、給分浜と小淵、裏浜の谷川浜と大谷川浜と祝浜、寄磯浜と前網浜は、それぞれ本郷と端郷の関係である。合同の村落組織や漁撈組織を持つなど一体的な村落社会が営まれているところもあれば、端郷も独自の村落組織を持ち、本郷と端郷がたびたび漁場争いしていたなど、機能的に独立しているところもある。小淵や大谷川浜は後者の例で、特に小淵は総人口・漁業人口ともに、本郷である給分浜を超える、牡鹿地区有数の漁村である。集落同士の関係が深い一方で、明らかな差異化が見られることからこの項では小淵と給分浜、その隣に位置する大原浜を隣接する集落の例として取り上げる。

大原浜、給分浜、小淵は、大原湾に面する表浜の集落で、大原浜と小淵は約2 kmの距離である。大謀網漁が盛んに行われてきた地域で、大正期までは大原浜4カ統、給分浜1カ統、小淵1カ統、給分浜・小淵の共有で1カ統の、計7カ統の網を有していた。大謀網漁の衰退とともに、小型定置網漁や養殖漁業に移行していくが、戦後から現代までの集落社会における漁業の位置付けは三様である。グラフ1は、東日本大震災以前の総世帯数・漁業世帯数を集落別に示したものである。総世帯数・漁業世帯数ともに最も多いのが小淵で、大原浜、給分浜は大きく差が開いている。特に、大原浜は漁業世帯が1割程度にとどまっており、実質的に非漁村集落といえる。

この差に重なる慣用表現として、「大原浜は桐の下駄、給分浜は藁草履、小淵は雪駄」という言い回しがある。



地図2. 大原浜・給分浜・小淵の位置（五万分の一地形図をもとに作成）



グラフ1. 平成10年の世帯数比較〔佐藤 2015〕による〕

これは、小湊出身で大原浜に嫁いだ昭和9（1934）年生まれの女性から聞いた表現で、大原浜より小湊でよくいわれていたそうである。それぞれの村柄を示すもので、次のような開村の経緯や集落の展開を背景としているという。

大原浜は、葛西氏家臣の石森氏が城を構え、開村した集落である。仙台藩伊達家の御仮屋が置かれ、御仮屋守や遠島肝入の役職を石森氏が務めるなど、牡鹿半島の政治・行政的な拠点の一つとなった。ほかにもいくつかの武家に由来する家筋が定着している集落であり、「桐の下駄」は高級な履物を意味しているという。4つの大謀網を持つが、大網師は気仙地方から呼び、集落内から人員を充当していたわけではなかった。近代には、大原村役場・小学校・郵便局が所在したため勤め人が多く、旧道沿いには商店・食堂・旅館・水産加工場等が立ち並び、様々な職種が居住する在町だった。

給分浜は半島でも最も古い時期の開村であり、鎌倉時代の作と伝えられる木造十一面観音立像（国指定重要有形文化財）や、大謀網の創始者とされる鳥海弥三郎の伝説など、古くからの信仰や伝承が伝わる。谷津や河岸段丘に田畑が形成され、3集落内では藩政期から農業自給率が比較的高い集落だった。「藁草履」は、漁村ながら質素で堅実な村柄を評したものであるという。

一方で、小湊の「雪駄」は、尻鉄が地面に当たる音から連想して、漁村的な活気や漁師たちの気質を表現したものとしてされる。グラフ1のとおり、震災前は漁家世帯が6割を超える漁業集落で、定置網漁や筒漁のほか、ワカメやカキの養殖が盛んである。給分浜の端郷だが、藩政期には寄港地として賑わい、明治期のテレビン油工場、昭和期の農蚕組合など、漁業以外の産業へも取り組んでいた。

下駄・藁草履・雪駄の表現は、小湊の視点であることを踏まえても、単なる村柄表現にとどまらず、それぞれの集落の構造的な違いにも通じている。例えば、牡鹿半島では恋愛をスキズキと呼び、スキズキによる結婚や結婚した人をナレアイというが、大原浜ではナレアイが好まれないのに対し、小湊は比較的寛容だった。このことは婚姻圏にも表れており、大原浜の婚姻圏は広く、県内内陸部や県外を含め、7割が牡鹿地区外と縁組していた。一方の小湊は、約半分が牡鹿地区内での婚姻だった。このことは、大原浜は他の2集落に対し階層性が明確であり、職種や階層を同じくする家同士で縁組することが多

かったこととも整合性がある。他方で、小湊では漁家同士の婚姻が歓迎されることから村内婚を含む近い範囲の婚姻が多く、ナレアイも否定されなかったのである（戸邊2019）。

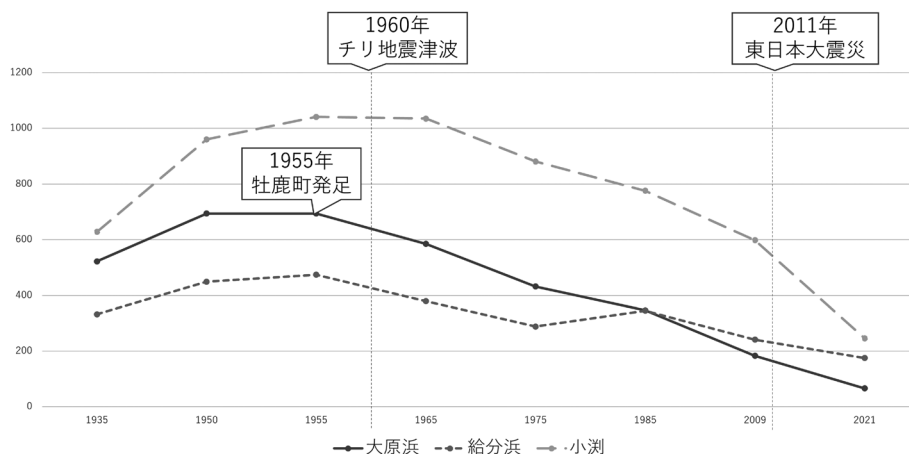
以上のように、隣り合う大原浜、給分浜、小湊は、3集落で一つの生活圏を形づくりつつ、異なる村落構造の集落として展開した。大原浜の御仮屋守や給分浜の古くからの伝承、小湊の様々な産業への取組など、履物に象徴される各集落の性質は、現代も顕著である。

#### 4. 東日本大震災と人口変動

大原浜、給分浜、小湊の集落は、東日本大震災において深刻な津波被害を受けた地域である。津波常襲地でもあり、住民の避難行動は迅速だったものの、沿岸部の家屋の多くが被災し、居住禁止区域となった。漁船や漁具、養殖筏なども多くが流出・破損した。ここでは、前章で示された各集落の村落構造を前提に、戦前から東日本大震災後までの人口動態により、震災後の集落の展開を捉えたい。

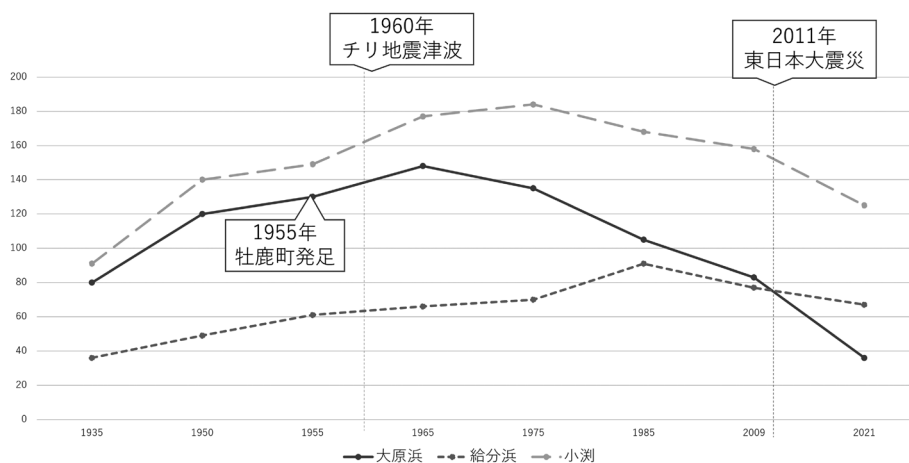
グラフ2は、昭和10（1935）年から現在までの人口の推移を示したものである。いずれの集落も戦後に人口が増加しているが、その後減少に転じている。昭和30（1955）年の鮎川町・大原村合併（牡鹿町発足）、昭和30年代の漁業不振、昭和35（1960）年のチリ地震津波などが、この時期の人口減少にとって複合的な要因となったと見られる。大原浜は、合併を機に行政・経済の中心的機能が失われ、進学や就職を機に都市部に定住する者が増えたことで過疎化が進んだ。人口の変動が最も大きい小湊は、チリ地震津波で漁業が大きく被害を受けたほか、半島のほかの漁村と同じく漁業不振によって離職者が増加した。漁業依存度の高い経営から抜け出すため、昭和43（1958）年に農事組合法人牧崎農蚕組合が設立されたが、軌道に乗らないまま、12年後に解散している。以来、小湊の主産業は養殖を含む漁業となっている。給分浜は人口変動が最も少ないが、過疎化が進んでいる点は同じである。更に、東日本大震災が発生した平成23年以降は、3集落とも人口が減少しており、特に小湊は急激な減少となっている。

しかし、世帯数の推移においては、違う側面が浮かび上がってくる。グラフ3を見ると、3集落とも震災以降に世帯数は減少しているものの、小湊は人口ほど極端な



グラフ2. 人口の推移（住民基本台帳による）





グラフ3. 世帯数の推移 (住民基本台帳による)

変化にはなっておらず、給分浜に至ってはほぼ横ばいである。大原浜のみが、平成17(2005)年から令和3(2021)年の間に世帯数を半減させている。この違いは、集落の基幹産業の有無に起因すると考えられる。

牡鹿半島のみならず、東日本大震災で津波被害を受けた沿岸の地域の多くは、居住制限が設けられ新たに住居を立て直すことができなくなった。高台へ集団移転することになったものの、復興住宅が完成したのは大原浜と給分浜が平成27(2015)年度、小渕が平成29(2017)年度と、災害発生から数年が経過していた。被災後、すぐに住まいを再建する見通しが立てられなかったことで、住民たちは集落を離れる決断をせざるをえなかったといえる。大原浜の場合、都市部で生活していた子供が、被災をきっかけに親を呼び寄せるということも多く見られた。

一方で、給分浜・小渕では、漁業の再起が世帯まるごとの転居に歯止めをかける形となった。震災前までは3世代同居の漁業者世帯が多かったが、仮設住宅は手狭ということもあり、親世代のみ集落に残り、子世代は集落から離れて生活することを選択するという家が現れた。世帯の分離は、漁業と家を継続する上でいくつかの利点があった。一つは、妻(嫁)の職業選択の幅が広がったことである。嫁は漁家にとって重要な働き手だが、現代においては結婚のハードルの一つとなっており、たとえ働き手として見込まれていなくても、給分浜・小渕周辺に必ずしも適当な勤務先があるわけではなかった。集落から離れて暮らし、妻が漁業以外の仕事を持つことで、結婚以前のキャリアが活かせるほか、家計の安定にもつながる。また、牡鹿半島には小中学校が少なく、高等学校以上の高等教育機関もないため、就学年齢の子供がいる家では進学も懸念事項だった。集落から離れることで、この点も解消できるようになった。このように、人口に比べて世帯数の減少が比較的抑えられたのは、集落外で暮らし、夫のみが漁業に通勤するライフスタイルの創出が、一つの要因であると考えられる。

被災によって集落の凝集性が揺らぐ中、再起を見込めるだけの在地的な産業のあることは重要である。漁業が甚大な被害を受けても、それを立て直すことが集落で暮らし続けるモチベーションになりうることは明らかである。集落で暮らさずに集落を支えるという選択肢が生まれたことについては、漁業後継者の減少・高齢化にも影響する可能性があることから、漁業形態・家・集落社会

それぞれの持続可能性について、継続して見ていく必要がある。

## 5. 非漁村の復興

漁業集落ではない大原浜では、震災以前から過疎化が進み、高齢者だけの世帯が増えていた。東日本大震災は、大原浜の人口や世帯数の減少を早める結果となった。この項では、震災後の大原浜における集落の凝集性と復興の所在について考察する。

住民の職業が多様で、生業面の共同性が低かった大原浜において、住民同士の重要な結びつきだったのが契約講(実業団)である。契約講が担っていた役割は、行政区<sup>(5)</sup>や各組合、消防団に分かれていく中で縮小していき、昭和40年代初め頃の大原浜契約講は、人口減少で講員が少なくなっていたこともあり、活動が困難になっていた。これにより、春祈禱(正月)、御神木祭(2月)、夏祭り(7月)などの祭り行事は、実施できない、あるいは縮小して開催する状況が続いたが、若者たちの奔走により、昭和52(1977)年に契約講が復活し、祭り行事も実施できるようになった(牡鹿町誌1987)。

このような経緯があるため、大原浜にとって祭り行事の実施は、集落の凝集性を高める重要な機会となっている。震災後に大原浜を離れた元住民にとっても、祭り行事は集落に戻る機会であり、住民同士が交流する貴重な場である。

他方で、御神木祭りの山車曳行や夏祭りの神輿渡御など、人口減少や少子高齢化による人手不足で契約講だけではの実施が困難になっている。本来的には契約講を抜けている年齢の男性や、小学校の頃に祭囃子を習った女性など、参加可能な人が全員加わった上で、県内外の大勢のボランティアが協力し、催行している。こうした中で、女性を契約講の正式なメンバーとして受け入れるなど、契約講の在り方も変化してきている。新型コロナウイルスの感染拡大により、令和2年2月以降は行事を中止・縮小していることも、今後の継続の課題といえる。

基幹産業のない大原浜にとって、復興は経済的な回復ではない。堤防が改修され海が臨めなくなり、旧道沿いに広がっていた町と呼ばれる字が広場と駐車場に変わった現在、かつての景観を取り戻すことも目的ではない。祭り行事は、大原浜が再び統合するための機会であり、集落が持続するために重要であるといえる。

## 6. おわりに

牡鹿半島における漁業と村落構造の関連を、大原浜、給分浜、小湊の3集落の比較を通して明らかにした。「大原浜は桐の下駄、給分浜は藁草履、小湊は雪駄」の慣用表現が示すとおり、3集落は同じ表浜の集落でありながら、自他ともに全く異なる性質の集落として認識されている。それは住民の認識だけではなく、漁家の割合と3集落の歴史からも裏付けられた。また、震災前から高齢化と過疎化が進む大原浜では人口減少を止められないのに対し、漁業を核に復興を目指す小湊と給分浜では、新たな家の在り方を創出しながら持続可能な集落社会の形成が図られていることも明らかとなった。

このように、今回着目した3集落は、近接しながら異なる村落構造を有しており、牡鹿半島集落社会の差異を抽出する上では有効だった。ただし、捕鯨の町として発展した鮎川浜や、裏浜で地形的に独立性が高い集落、半島の根元に位置する石巻市萩浜地区や女川町の集落、周辺島嶼の集落などの分析は未了である。他の特徴を持つ集落についても分析が蓄積されることで、半島の全体像が見えてくると思われる。

牡鹿半島は、拙著でも指摘したとおり、男女の性別役割について特徴のある地域である（戸邊 2019）。契約講が婚礼への関与を避けていたのに対し、女講中が嫁荷の引渡しに立ち合い、祝い唄を歌うなど、三陸海岸や石巻市の沿岸部地域に分布する婚礼習俗との差異が認められている。牡鹿半島は、かつて竹内利美が年序集団体系を指摘しているものの（竹内ほか 1959）、半島部に固有の習俗や村落構造の背景については結論の出ないまま現在に至っている。三陸地方あるいは陸前北部地域における牡鹿半島の社会的特質については、引き続き明らかにしていく必要がある。

## 註

(1) 後継者なしと答えた漁家は、表浜74.4%、裏浜63.0%だっ

た（佐藤 2015）。

- (2) 労働力とするために他家から迎えられ、養育される子供。成長した際には、養育先の家の世話により独立することが多かった。
- (3) 観音マケのみ三つの苗字による5家の合同マケである（平山 1969: 97）。
- (4) 船舶、定置網漁業、浅海養殖漁業、漁具漁業等の被害総額は2,144万円余りで、小湊全体の被害総額の69.4%に当たる（牡鹿町誌編纂委員会 1984: 486）。
- (5) 牡鹿地区では、集落の総意形成や行政との連絡を行う集落ごとの基幹的組織を、行政区という。行政区は集落住民である全ての家が参加する。

## 引用文献

- 牡鹿町誌編纂委員会編（1987）．牡鹿町誌 上．牡鹿町誌編纂委員会．
- 牡鹿町誌編纂委員会編（2005）．牡鹿町誌 中．牡鹿町誌編纂委員会．
- 亀山慶一（1945）．牡鹿半島における漁労組織と労働力について．民間伝承14-12．民間伝承の会
- 佐藤利明（2015）．津波被災以前における牡鹿半島漁村の漁業構造—第10漁業センサス（1998年）のデータから—．石巻専修大学研究紀要26．
- 竹内利美・江馬成也・藤木三千人（1959）．東北村落と年序組織．東北大学教育学部研究年報7．
- 竹田 旦（1969）．シンルイとその特性．陸前北部の民俗（和歌森太郎、編）．吉川弘文館．
- 東北歴史資料館（1984）．三陸沿岸の漁村と漁業習俗 上．
- 戸邊優美（2019）．女講中の民俗誌—牡鹿半島における女性同士のつながり—．岩田書院．
- 平山和彦（1969）．牡鹿半島一帯における年齢集団の諸相．陸前北部の民俗（和歌森太郎、編）．吉川弘文館．
- 宮城県水産研究開発センター（1990）．宮城県の伝統的漁具漁法3北部地区．